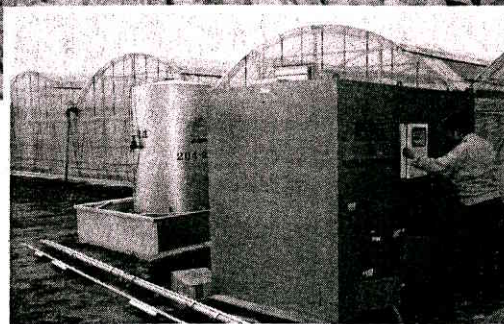


熱水土壤消毒機



熱水土壤消毒を実施した圃場。「熱水土壤消毒で生育が良くなった」と話す石川さん（愛知県安城市）㊤

部会で導入した熱水土壤消毒機㊤

減農薬に効果

J A あいち中央

チンゲンサイ部会挙げ

愛知県のJAあいち中央チンゲン菜部会は、今年から95度の熱水で土壌を消毒する手法を取り入れている。これまでの減農薬・減化学肥料栽培に加え、土壌消毒でも農薬に頼らないようにした。熱水で十分な消毒効果が得られるよう、土づくりや施肥にも工夫を凝らし、健康な土壌にして連作障害を防いでいく。

1996年からチンゲンサイで産地化し、現在は10人の部会員が4・5畝で年45万箱（1箱25kg入り）を出荷している。

当初から減農薬・減化学肥料栽培を進めてきた。今は、JAあいち経済連が取り組む化学農薬・化学肥料を削減した農産物「いきいき愛知」の認証を受けている。

今年からは、土壌消毒でも化学農薬を使わないよう、約450万円で熱水土壤消毒機を導入し、すべての部会員が利用している。部会長で、90坪の施設で周年栽培する石川和昭さん（52）は「手間もコストもかかるが、安全面からみて導入を決めた」と話す。

消毒機は、最高95度の熱水を、1時間当たり6000リットル灌水（かんすい）する。同地域に多い

標準的な施設（間口6坪、奥行70坪）なら、灌水時間は12時間。灌水終了後、マルチしたまま1日以上置いておく。春から夏にかけて、機械を部会員で回して利用していく。石川さんは「塩類除去の効果もあり生育が良くなった」と、病害防除以外でも効果があると感

も努め、堆肥（たいひ）を10坪当たり10kg投入している。さらに、過剰施肥を防ぐため、部会で土壌診断を実施。その結果を基に、有機質60%の部会専用肥料を肥料メーカーに作ってもらっている。「農薬を減らす努力は必要で、熱水土壤消毒はその一つになる」と石川さん。部会員全員が効果良く消毒を実践し、同じ効果を得ることで、一層の減農薬につながるという。

石川さんは土づくりにも努め、堆肥（たいひ）を10坪当たり10kg投入している。さらに、過剰施肥を防ぐため、部会で土壌診断を実施。その結果を基に、有機質60%の部会専用肥料を肥料メーカーに作ってもらっている。「農薬を減らす努力は必要で、熱水土壤消毒はその一つになる」と石川さん。部会員全員が効果良く消毒を実践し、同じ効果を得ることで、一層の減農薬につながるという。